

## 63 公家・寺院日記から見た眼科の動向

奥沢康正

室町時代から安土・桃山時代には、多くの朝廷に奉仕する公家、もしくは僧侶の筆録した日記が残されている。これらの日記には、その当時の政治・社会・宗教の実態を記録しているだけでなく、筆録者、家族、知己の人々などの治療を受けた病気の状況、官医や民間医の生業と動向、特に眼科医としての活動、治療内容なども僅かながら見えてくる。

これらの我が国に伝存する数多くの日記は中国や欧米にその比を見ないとされるが、その数は膨大で、『国史大辞典』には平安時代から織豊時代に及ぶ、主な記録数は五一〇数点にのぼると記す。

公家日記の一部は服部敏夫・新村拓氏による調査が既にあるが、演者は鎌倉・南北朝時代の筆記主 藤原定家(二一六二～二四一)の『明月記』(一一八〇～一二三五)、

- 筆記主 洞院公賢(一二九一～一三六〇)の『園太曆』(一一三一～一三六〇)、室町・戦国時代から江戸期の筆記主 中原康富(一三九九～一四五七)の『康富記』(一四一七～一四五五)、筆記主 山科教言(一三二八～一四一〇)の『教言卿記』(一四〇五～一四二二)、筆記主 後崇光院伏見宮貞成親王(一三七二～一四五六)の『看聞日記』(一四一六～一四四八)、筆記主 季變真薬(？～一四六九)・亀泉集証(？～一四九三)の『蔭涼軒日録』(一四三五～一四九三)、筆記主 三条西実隆(一四五五～一五二七)の『実隆公記』(一四五五～一五三七)、筆記主 山科言国(一四五二～一五〇三)の『言国卿記』(一四七四～一五〇二)、禁中御湯殿の上の間で、天皇の側近に奉仕する女官の当番日記『御湯殿の上の日記』(一四七七～一六二五)、筆記主 多聞院英俊その他の『多聞院日記』(一四七八～一六二八)、京都相国寺塔頭鹿苑院の景徐周麟・梅叔法霖・有節瑞保他の『鹿苑日録』(一四八七～一六五二)、筆記主 山科言繼(一五〇七～一五七九)の『言繼卿記』(一五二七～一五七六)、筆記主 吉田兼見(一五三五～一六一〇)の『兼見卿記』(一五七〇～一五九二)、筆記主 山科言経(一五四三～一

六一一」の『言経卿記』（一五七六～一六〇八）の中から特に眼科領域に関連する医療・医師達の活動につき、以下の項目を主として調査、集録した。

1、公家・武士達の眼病記録（病名とその経過、当時用いられた眼科用語等）

2、民間療法を含めた眼科治療（内服・秘薬・点洗眼・針療法・蛭飼治療等）の実態

3、目医師達（僧医・馬島流眼科その他の流派等の民間医）の実名から

4、盲人の活動等

集録した条項数は『明月記』をはじめとして二五〇余条項となった。当時の公家・僧侶達が筆録した日記には豊臣秀吉、徳川秀忠、著名な人物等が眼病を患い、九州、江戸への下向を延期した等の風聞さらに筆録者自らが蛭療法によって結膜、眼瞼へ数十匹を吸着させ、外眼部疾患による眼瞼腫脹により宮廷への出仕も出来ず障子を隔てて会話し、さまざまな治療を行い、晩年になると老眼に苦悩した姿が見えてくる。

さらに公家・僧による往診依頼により目医師達が投薬、

外眼部手術等を行ない、数種の点洗眼薬名を見る。当時の尾張の馬島流、東福寺等の僧医の名から新たに馬島流から分派した眼科医も判明した。さらに盲人が生業とした琵琶法師を公家達が大切にしていた記述等、これ等具体的事例について報告したい。

（京都府立医科大学眼科）